

「莊子祠堂記」からみた『莊子』の孔子説話と戯曲性

水 野 厚 志

東京国際大学論叢 人文・社会学研究 第8号 抜刷
2023年（令和5年）3月20日

「莊子祠堂記」からみた『莊子』の孔子説話と戯曲性

水 野 厚 志

Confucian Discourse and the Dramatic Nature of *Zhuangzi* in the *Zhuangzi Citang Ji*.

MIZUNO, Atsushi

Abstract

The *Zhuangzi Citang Ji*, written by Su Shi during the Northern Song dynasty, inherits the ideas of Han Yu, developed during the Tang dynasty. This document asserts that the original thought of *Zhuangzi* is not what was criticized by Confucius, nor can it be interpreted in a way that deviates from the teachings of the Tao. Since the time of Han Yu and Su Shi, the *Zhuangzi Citang Ji* has been a source of support for those who doubt various sections of the text of *Zhuangzi*. Although the *Zhuangzi Citang Ji* is often mentioned in studies on the thought of the Northern Song, it has not yet been fully translated in Japan. This essay compares and contrasts the quotations from the Shiji and other sources with Su Shi's own work, as well as clarifies the features of Su Shi's discourse by providing a translation of the *Zhuangzi Citang Ji* in its entirety.

Keywords: 莊子 (Zhuangzi), 「莊子祠堂記」, 「莊周列傳」, 孔子説話, 戯曲

目 次

- はじめに
- 一. 「莊子祠堂記」に描かれた『莊子』
 - (1) 「莊子祠堂記」について
 - (2) 『史記』の引用と「寓言」篇及び「列禦寇」篇の引用
 - (3) 「楚公子微服出亡、而門者難之」の典拠
 - 二. 「莊子祠堂記」に於ける論點
 - (1) 『莊子』に於ける孔子批判
 - (2) 『史記』及び編纂者への批判
- まとめ——「莊子祠堂記」が果たした役割と問題點——

はじめに

唐宋八大家の一人として夙に名を知られた蘇軾（一〇三六年～一一〇一年）には、『莊子』に対する記述體の文章「莊子祠堂記」がある¹⁾。「莊子祠堂記」は、蘇東坡以降『莊子』の外篇・雜篇について、その眞偽が持ち出される度に、注目を浴びてきた²⁾。舊來の論者が注目しているのは、蘇東坡の主張する「盜跖」・「漁父」の二篇は、本當に孔子を否定しているのかのようであり、「讓王」・「說劍」の二篇に至っては、いずれも見聞が狭く（單純であり、深遠な）道にそぐわない。その「讓王」・「說劍」・「漁父」・「盜跖」の四篇を取り去って、四篇の前に置かれている「寓言」篇から「列御寇」の篇に繋げてみると、本來一章であったことがわかるという一文である。そして、愚か者が（どこかから）四篇を盗み取って文章に加えたのだという文意についても、その後の莊子を研究する者たちの注目を集めてきた³⁾。また、「莊子祠堂記」は、先行する司馬遷（紀元前一四五/一三五年?～紀元前八七/八六年?）の「莊子列傳」に反駁を加えることによって、四篇及び編者について批判しているが、果たしてその推察は正鵠を得ているのか、改めて内容を細かく吟味しつつ、丁寧に読むことによって、「莊子祠堂記」が果たした役割と問題点について明らかにしたい。

一. 「莊子祠堂記」に描かれた『莊子』

(1) 「莊子祠堂記」について

蘇東坡の「莊子祠堂記」であるが、管見の及ぶ限りにおいて、完譯されたものは未見である。そこでまずは全文を挙げ、書き下し文と譯文とを併せて示すこととする。また、全文の構成は三段に分かれるので、それぞれのパートごとに①～③の番號をつけて示すこととする。

「莊子祠堂記」⁴⁾

①

莊子、蒙人也。嘗爲蒙漆園吏。沒千餘歲、而蒙未有祀之者。縣令 祕書丞王兢始作祠堂、求文以爲記。

《書き下し文》

莊子は、蒙人なり。嘗て蒙の漆園の吏と爲る。沒して千餘歲にして、蒙未だ之を祀る者有らず。縣令 祕書丞王兢始めて祠堂を作り、文を求められて以て記を爲る。

《譯文》

莊子は蒙（殷の末裔が封じられ、祭祀を繼いだ宋に屬す。現在の河南省商丘市）の出身である。以前 蒙で漆園の役人として働いていた。亡くなって千年以上がたったが、蒙では誰も莊子を祀ったことがなかった。地元の縣令（を経て現在）祕書丞の（位にある）王兢が初めて莊子の祠を建て、文章を書いてほしいと求められたので（莊子祠堂）記を作った。

②

謹按『史記』、莊子與梁惠王・齊宣王同時、其學無所不窺、然要本歸於老子之言。故其著書十餘萬言、大抵率寓言也。作「漁父」・「盜跖」・「胠篋」、以詆訾孔子之徒、以明老子之術、此知莊子之粗者。餘以爲莊子蓋助孔子者、要不可以爲法耳。

楚公子微服出亡、而門者難之。其僕操箠而罵曰、「隸也不力」。門者出之。事固有倒行而逆施者。以僕爲不愛公子、則不可。以爲事公子之法、亦不可。故莊子之言、皆實豫而文不豫、

陽擠而陰助之，其正言蓋無幾。至於詆訾孔子，未嘗不微見其意。其論天下道術，自墨翟・禽滑厘・彭蒙・慎到・田駢・關尹・老聃之徒，以至於其身，皆以爲一家，而孔子不與。其尊之也至矣。

《書き下し文》

謹んで『史記』を按ずるに、「莊子は梁の恵王・齊の宣王と時を同じくし、其の學窺はざる所無けれども、然れども要は本老子の言に歸す。故に其の著書十餘萬言、大抵率て寓言なり。「漁父」・「盜跖」・「胠篋」を作り、以て孔子の徒を詆訾し、以て老子の術を明らかにす」と。此れ莊子を知るの粗なる者なり。餘以爲らく莊子は蓋し孔子を助くる者にして、要するに以て法と爲すべからざるのみ。

楚の公子微服して出で亡れて、門者之を難ず。其の僕篋を操り罵りて曰く、「隸や力めず」と。門者之を出す。事固より倒行して逆施する者有り。僕を以て公子を愛さずと爲せば則ち可ならず。以て公子に事ふるの法と爲すも亦た可ならず。故に莊子の言は、皆實に豫して文は豫せず、陽に擠して陰に之を助け、其の正言蓋し幾も無し。孔子を詆訾するに至りても、未だ嘗て微に其の意を見さずんばあらず。其の天下の道術を論ずるに、墨翟・禽滑厘・彭蒙・慎到・田駢・關尹・老聃の徒自り、以て其の身に至るまで、皆以て一家と爲すも、而れども孔子は與らず。其れ之を尊するや至れり。

《譯文》

『史記』の記載に據ると、「莊子は梁の恵王・齊の宣王と同時代であり、その學門は極めて博く、あらゆることを考察していたが、その最も大切な部分は老子の教えに基づくものである。そして、その著書は十餘萬言に及んだが、おおむね全て寓言であった。「漁父」・「盜跖」・「胠篋」等の文章を作って、孔子の仲間を誹謗し、老子の教義を明らかにしようとした」と書かれている。(これは) 莊子に對する粗雑な見方でしかない。莊子はやはり孔子を助けた人であって、ただ孔子を手本(として正面から賛同)することができなかつただけだと私は考える。

楚の國の公子が、(人目につかないように)身分の低い人の服装をして出奔しようとしたところ、門番は(その舉動に不審を抱き)公子を難詰した。(すると)召使は(公子に)鞭を振り上げて、「家來のくせに、家來らしくしていない」と罵った。(そこでやっと)門番は彼らを外に出した。(伍子胥の場合のように)そもそも物事には(君臣の義理に)逆らつて行動しなければならないこともある。召使が公子を愛していなかつたというのはおかしいが、公子にお仕えする規範とすることもできない。これと同様に、莊子の言葉は、實は(孔子に)賛同しているものであるが、言葉の上では賛同していない。表向きは(孔子を)否定しているが、裏では助けていて、正面から(孔子に)賛同した言葉は殆どない、といったところである。孔子を貶している場合でも、こっそりと、その(孔子に賛同の)意圖を表していないものはないのである。莊子は(「天下篇」の中で)世の中の道術について論じるが、墨翟・禽滑厘・彭蒙・慎到・田駢・關尹・老聃の仲間から、自分のことを語るところまで、ともに一つのグループと考えているが、孔子については語っていない。(それは實は)孔子に對する最大限の敬意を表している(からなの)のだ。

③

然餘嘗疑、「盜跖」・「漁父」則若眞詆孔子者。至於「讓王」・「說劍」，皆淺陋不入於道。反復觀之，得其「寓言」之意。終曰、「陽子居西游於秦，遇老子。老子曰、『而睢睢，而盱盱，而誰與居。太白若辱，盛德若不足』陽子居蹶然變容。其往也，舍者將迎其家，公執席，妻執巾櫛，舍者避席，煬者避竈。其反也，舍者與之爭席矣」。

去其「讓王」・「説劍」・「漁父」・「盜跖（跖）」四篇，以合於「列禦寇」之篇，曰「列禦寇之齊，中道而反，曰「吾鶩焉。吾食於十漿，而五漿先饋」。然後悟而笑曰，「是固一章也」。莊子之言未終，而昧者剽之以入其言。餘不可以不辨。凡分章名篇，皆出於世俗。非莊子本意。

元豐元年十一月十九日記

《書き下し文》

然れども餘嘗て疑へり。「盜跖」・「漁父」は則ち眞に孔子を詆る者のごとし。「讓王」・「説劍」に至りては、皆淺陋にして道に入らず、と。反復して之を觀るに、其の「寓言」の意を得たり。終に曰く、「陽子居 西のかた秦に遊び、老子に遇へり。老子曰く、『而 睢睢たり、而 盱盱たり、而 誰と與に居らんや。太白は辱なるがごとく、盛徳は足らざるがごとし』と。蹴然として容を變ふ。其の往くや、舍者 將に其の家に迎へんとし、公は席を執り、妻は巾櫛を執り、舍者は席を避け、煬者は竈を避く。その反るや、舍者之と席を争へり」と。

其の「讓王」・「説劍」・「漁父」・「盜跖（跖）」四篇を去りて、以て「列禦寇」の篇に合し、曰く、「列禦寇 齊に之き、中道にして反る」と、曰く、「吾鶩けり。吾十漿に食して、五漿先づ饋れり」と。然る後悟りて笑ひて曰く、「是れ固より一章なり」と。莊子の言 未だ終らずして、昧者 之を剽みて以て其の言に入る。餘 以て辨せざるべからず。凡そ章を分け篇に名づくるは、皆 世俗に出づ。莊子の本意に非ず。

元豐元年十一月十九日 記す

《譯文》

しかし私は以前、「盜跖」・「漁父」（の二篇）は、本當に孔子を否定しているのではないか。（また）「讓王」・「説劍」（の二篇）に至っては、いずれも見聞が狭く（深遠な）道にそぐわないものではなからうか、と疑問を感じていた。何度も讀んで考えているうちに、「寓言」（の篇）の意圖する所が分かってきた。（「寓言」篇の）終りには、「陽子居は西方の秦に赴き、老子を出迎えた。老子は（陽子居に）、『お前はびくびくしながら他人の機嫌を伺い、きよろきよると目を見張っているが、お前と誰と一緒に居たいものか（誰も寄りつかないぞ）。たいへん潔白なものは（逆に）汚れているようであり、盛大な道の働きは（かえって）足りないように見えるものだ』と答えた。（陽子居は）心を引き締めて嚴肅な顔つきになった。陽子居が旅館に着いたときには、宿泊客たちは慌ただしく出迎えようとし、旅館の主人は自ら座布團を用意し、女將は手ぬぐいと櫛を差し出し、宿泊客たちは同席せず、暖を求める者も暖爐を譲った。（ところが）陽子居が歸る頃には、宿泊客たちは彼と座布團の取り合いをするような状況になった」とある。

（そこで試しに、孔子を否定していたり、見聞が狭く道にそぐわない）「讓王」・「説劍」・「漁父」・「盜跖」四篇を取り去って、「列禦寇」の篇に繋げてみると、「列禦寇は齊に行き、途中で引き返してきた。（列禦寇は）いった、「私はびっくりした。私は十軒ほどで飲み食いしたが、（そのうち）五軒では（他の客を差し置いて）先に（私の所に）持ってきた」といわれている。このように繋いでみて初めて「これは（本來）一章のはずだったのだ」と気がつき、笑わずにはいられなかった。莊子の言葉が終わらないうちに、愚か者が（どこかから）四篇を盗み取って（「列禦寇」篇の冒頭の）文章に加えたのだ。私はこのような理由で（四篇を莊子の主張と）辨別せざるを得ない。（『莊子』という書物）全てについて、まとまった一區切りごとに分け、各篇に名前を付けたのは、皆揃って世間の俗人から出たのであって、莊子の本意ではないのである。

元豐元年（西暦一三二一年）十一月十九日 記す。

以上が「莊子祠堂記」であるが、全體は①から③の三つの内容から構成されている。①は「莊子祠堂記」を制作するに至った理由である。②では、『史記』に「漁父」・「盜跖」・「胠篋」等の文章を作って、孔子の仲間を誹謗し、老子の教義を明らかにしようとしたと有るが、莊子に対する粗雑な見方でしかないとする。そして、莊子は孔子を助けた人であって、孔子を手本にすることができなかつただけなのだ、と述べている。また、③では本當に孔子を否定しているのかのように見える「盜跖」・「漁父」の二篇と、道にそぐわない「讓王」・「説劍」の二篇を去り、「寓言」の最後の文章を「列御寇」篇の最初の文章に繋げると文意が通じる。『莊子』書をまとまった一區切りごとに分け、各篇に名前を付けたのは、世間の俗人から出たのであって、莊子の本意ではないのだと述べている。以上が全體の構成とその内容である。

ところで、「莊子祠堂記」は記述體の文章であり、非常に簡潔な内容となっているため、典據と突き合わせなければ、文意が通らないところもある。そこで次に、「莊子祠堂記」が引用している諸文献と付き合わせるることによって、蘇東坡の真意を探っていくことにする。

(2) 『史記』の引用と「寓言」篇及び「列禦寇」篇の引用

「老子韓非列傳」の中の「莊周列傳」は次の通りである⁵⁾。※波線を引いた箇所はすべて『史記』「莊周列傳」を「莊子祠堂記」が引用している箇所である。

莊子者、蒙人也。名周。周嘗爲蒙漆園吏。與梁惠王・齊宣王同時。其學無所不窺。然其要本歸於老子之言。故其著書十餘萬言。大抵率寓言也。作「漁父」・「盜跖」・「胠篋」。以詆訾孔子之徒。以明老子之術。「畏累虛」・「亢桑子」之屬。皆空語無事實。然善屬書離辭。指事類情。用剽剝儒・墨。雖當世宿學不能自解免也。其言洸洋自恣以適己。故自王公大人不能器之。楚威王。聞莊周賢。使使厚幣迎之。許以爲相。莊周笑謂楚使者曰。「千金。重利。卿相。尊位也。子獨不見郊祭之犧牛乎。養食之數歲。衣以文繡。以入大廟。當是之時。雖欲爲孤豚。豈可得乎。子亟去。無汚我。我寧遊戲污瀆之中自快。無爲有國者所羈。終身不仕。以快吾志焉。」

《書き下し文》

莊子は、蒙人なり。名は周。周嘗て蒙の漆園の吏爲り。梁の惠王・齊の宣王と時を同じくし。其の學窺はざる所無けれども、然れども要は本、老子の言に歸す。故に其の著書十餘萬言。大抵率て寓言なり。「漁父」・「盜跖」・「胠篋」を作り、以て孔子の徒を詆訾し、以て老子の術を明らかにす。「畏累虚」・「亢桑子」の屬は、皆空語にして事實無し。然れども善く書を屬け辭を離ね、事を指し情を類し、用て儒・墨を剽剝す。當世の宿學と雖も自ら解免する能わず。其の言は洸洋として自ら恣にして以て己に適う。故に王公大人自り、之を器とする能わず。楚の威王、莊周の賢なるを聞き、使いをして幣を厚くして之を迎え、許すに相と爲すを以てせしむ。莊周、笑いて楚の使者に謂いて曰く、「千金は、重利なり、卿相は、尊位なり。子は獨だ郊祭の犧牛を見ざるや。之を養食すること數歲、衣するに文繡を以てし、以て大廟に入る。是の時に當り、孤豚爲らんと欲すと雖も、豈に得べけんや。子亟すみやかに去り、我を汚す無かれ。我、寧ろ汚瀆の中に遊戲して自ら快とせん。國を有つ者の羈つなぐ所と爲る無く、身を終うるまで仕えず、以て吾が志を快くせん」と。

《譯文》

莊子は蒙(殷の末裔が封じられ、祭祀を繼いだ宋に屬す。現在の河南省商丘市)の出身である。名は周という。莊周は以前蒙で漆園の役人として働いていた。梁の惠王・齊の宣王と同時代であり、その學問は極めて博く、あらゆることを考察していたが、その最も大切な部分は老子の教えに基づくものである。そして、その著書は十餘萬言に及んだが、おおむね全て寓言である。「漁父」・「盜跖」・「胠篋」等の文章を作って、孔子の仲間を誹謗し、老子の教義を明らかにしようとした。「畏累虚」・「亢桑子」といった類いは、すべて内容の伴わない繪空事であり事實を記していない。しかし、巧みに書物をよせ集め言葉を(つぎつぎときれいに)並び連ね、事柄を指し示して人の心の働きによるさまざまな思いを類別し、儒家や墨家(の偽りの考え)をそぎ取り剥がした。この世で長年學問を積んだ者であっても論難から逃れることはできない。その言葉は奥深く廣々としていて(つかみ所がなく)思いのまま勝手に振る舞い、それが自分にとって快適でもある。だから王侯や大夫であっても、(莊子を)物として扱うことはできない。楚の威王は、莊周が賢者であることを耳にすると、使者にたくさんの贈り物を持たせて迎え入れ、宰相に据えようとした。莊周は笑って楚の使者に言った。「千金は莫大な利益で、公卿宰相は尊い位です。あなたは郊外で天を祀る(時の)犠牲の牛をご覧になったことがないのですか。牛は何年も(の間、美味しい)食べ物によって養われ、あや模様の縫いとりのある衣服を着せられて、大廟に入れられる。この時になって、一頭の豚でありたいと望んでも、どうして望みが適いますか。どうか速やかに立ち去り、私を汚さないでください。私は(豚のように)汚ない泥の中で自分の好きなように遊び戯れていたのです。國を治める者に繋がれて自由を拘束されることなく、一生涯(誰にも)仕えず、自分の心につかえるものをなくしたいのです」と。

『史記』の記述と比較すると、「莊子祠堂記」では、前半の部分を殆ど引用している。その内容の中心となっているのは、蒙の地に「莊子祠堂」を作ることになったいきさつについての説明ではない。『史記』の引用の後に「此知莊子之粗者。餘以爲莊子蓋助孔子者、要不可以爲法耳(それは莊子に對する粗雑な見方でしかない。莊子はやはり孔子を助けた人であって、ただ孔子を手本にすることができなかつただけだと私は考えている)」とあるように、『史記』の「孔子の仲間を誹謗した」という記述はでたらめであり、本來莊子は孔子を助けた存在なのだというのが、蘇東坡の「莊子祠堂記」での訴えである。『史記』の記述では、後半に「(畏累虚)・(亢桑子)之屬、皆空語無事實。然善屬書離辭、指事類情、用剝削儒・墨、雖當世宿學不能自解免也(〈畏累虚)・(亢桑子)といった類いは、すべて内容の伴わない繪空事であり事實を記していない。しかし、巧みに書物をよせ集め言葉を(つぎつぎときれいに)並び連ね、事柄を指し示して人の心の働きによるさまざまな思いを類別し、儒家や墨家《の偽りの考え》をそぎ取り剥がした)」とあるが、蘇東坡は『史記』でわざわざ篇名を挙げている「畏累虚」・「亢桑子(庚桑楚)」二篇については、特に意見もなく、全く取り上げていない。また、『史記』には最後に、「楚の威王が、莊周にたくさんの贈り物をし、宰相に据えようとしたところ、犠牲の牛のように生きたくない。束縛されることなく自由に生きたい」旨、記述されている。政治的野心を示すことになかつた莊子の物語としては、格好の材料になり得る題材ではあるが、蘇東坡はこの點にも全く目を向けていない。これらの問題については後述する「二.」の中で、改めて述べていく。

次に、最後の③を構成している「寓言」篇と「列禦寇」篇の當該箇所を挙げる⁶⁾。※波線を引いた箇所はすべて「莊子祠堂記」と共通する箇所である。

陽子居南之沛，老聃西遊於秦。邀於郊，至於梁而遇老子。老子中道仰天而歎曰，「始以汝爲可教，今不可也」。

陽子居不答。至舍，進盥漱巾櫛，脫履戶外，膝行而前曰，「向者弟子欲請夫子，夫不行不問，是以不敢。今聞矣，請問其過」。

老子曰，「而睢睢盱盱，而誰與居。大白若辱，盛德若不足」。

陽子居蹙然變容曰，「敬聞命矣」。

其往也，舍者迎將，其家公執席，妻執巾櫛，舍者避席，煬者避竈。其反也，舍者與之爭席矣。

《書き下し文》

陽子居 南のかた沛に之き，老聃 西のかた秦に遊び，郊に邀へ，梁に至りて老子に遇えり。老子 中道にして天を仰ぎて歎じて曰く，「始め汝を以て教ふべしと爲すも，今不可なり」と。

陽子居 答へず。舍に至り，盥 漱 巾 櫛を進め，屨を戶外に脱ぎ，膝行して前みて曰く，「向には弟子 夫子に請わんと欲するも，夫子は行きて問あらず，是を以て敢えてせざるなり。今聞あり。請ふ其の過を問はん」と。

老子曰く，「而 睢睢盱盱たり，而 誰と與にか居らんや。大白は辱なるがごとく，盛徳は足らざるがごとし」と。

陽子居 蹙然として容を變えて曰く，「敬んで命を聞かん」と。

其の往くや，舍者は迎將し，その家公は席を執り，妻は巾櫛を執り，舍者は席を避け，煬者は竈を避く。其の反るや，舍者之と席を争へり。

《譯文》

陽子居は南方の沛に赴くと，老聃は氣の向くまま西方の秦に向かおうとしていた。（そこで）郊外で（老聃を）出迎えようと考えたが，（陽子居は魏の都 大）梁の街まで来たところで老聃先生に会うことができた。

老聃先生は道中なのにもう空を仰いで嘆いておっしゃった。「以前お前には教えられるだろうと思っていたが，今見るとだめだな」と。陽子居は（ショックのあまり）答えられなかった。旅館に着くと，手を洗うためのたらい，口をすすぐための水，手ぬぐいと櫛を差し出し，履き物を部屋の外で脱ぎ，（恐れ慎んで）膝を地面に付けてにじり寄り，「先程 弟子たるわたくしは先生に教えていただくと思ったのですが，先生は道中ということもありゆったりとするゆとりも御座いませんでしたので，思い切って申し上げなかったのです。今は（旅館にお着きになって）落ち着かれました。どうか何が手拔かりなのかをお教えてください」と申し上げた。

老子は，「お前はびくびくしながら他人の機嫌を伺い，きよろきよろと目を見張っているが，お前と誰が一縷に居たいものか（誰も寄りつかないぞ）。たいへん潔白なものは（逆に）汚れているようであり，盛大な道の働きは（かえって）足りないように見えるものだ」と答えた。

陽子居は心を引き締めて嚴肅な顔つきになり，「謹んでお教えを承りました」と答えた。陽子居が旅館に着いたときには，宿泊客たちは慌ただしく出迎え，旅館の主人は自ら座布團を用意し，女將は手ぬぐいと櫛を差し出し，宿泊客たちは同席せず，暖を求める者も暖爐を譲った。（ところが）陽子居が歸る頃には，宿泊客たちと座布團の取り合いをするような状況になっていた。

「寓言」篇の篇末にある説話は、老子と陽子居との對話で成り立っている。「寓言」篇の原典に當ることによって、大きく省略されている文章を補い、全體の文脈をつかむことができる。「莊子祠堂記」の『史記』「莊周列傳」からの引用は、斷章取義に傾き、前半部分しか引用していないのに対して、「寓言」篇の原典からの引用では大幅に省略されてはいるが、文全體からまんべんなく引用している。そして何より「寓言」篇の原典は『史記』のように生き生きと人物が描かれているのが印象的である。

「寓言」篇の當該文書の中で、陽子居の道の習得について、老子は「而睢睢盱盱，而誰與居。大白若辱，盛德若不足（お前はびくびくしながら他人の機嫌を伺い、きよろきよろと目を見張っているが、お前と誰と一緒に居たいものか。たいへん潔白なものは汚れているようであり、盛大な道の働きは足りないように見えるものだ）」と足りない點を指摘する。すると陽子居は、「陽子居蹙然變容（心を引き締めて嚴肅な顔つきになった）」と示されているように、心に變化を生じる。そして老子に會う前とすっかり様子が変わってしまった。その様子は當初、「其往也，舍者迎將，其家公執席，妻執巾櫛，舍者避席，煬者避竈（陽子居が旅館に着いたときには、宿泊客たちは慌ただしく出迎えようとし、旅館の主人は自ら座布團を用意し、女將は手ぬぐいと櫛を差し出し、宿泊客たちは同席せず、暖を求める者も暖爐を譲った）」状況だったのに、「其反也，舍者與之爭席矣（陽子居が歸る頃には、宿泊客たちと座布團の取り合いをするような状況になっていた）」と描かれている。びくびくきよろきよろしながら他人の機嫌を伺うのを改め、體面を汚されても氣にしない、少し足りない人に見える位の態度で望むことによって、ごく短期間のうちに人々が本心で接してくれるようになったのである。

次に、「列禦寇」篇である⁷⁾。※波線を引いた箇所はすべて「莊子祠堂記」と共通する箇所である。

曰「列禦寇之齊，中道而反，曰『吾驚焉。吾食於十漿，而五漿先饋』。

列禦寇之齊，中道而反，遇伯昏瞀人。伯昏瞀人曰，「奚方而反」。

曰，「吾驚焉。」

曰，「惡乎驚。」

曰，「吾嘗食於十漿，而五漿先饋。」

伯昏瞀人曰，「若是，則汝何爲驚已。」

曰，「夫内誠不解，形謀成光，以外鎮人心，使人輕乎貴老，而肇其所患。夫瞀人特爲食羹之貨・多餘之贏，其爲利也薄，其爲權也輕，而猶若是，而況於萬乘之主乎。身勞於國而知盡於事，彼將任我以事而效我以功。吾是以驚。」

伯昏瞀人曰，「善哉觀乎。女處已。人將保女矣。」

无幾何而往，則戶外之屨滿矣。……。

《書き下し文》

列禦寇齊に之き，中道にして反り，伯昏瞀人に遇へり。伯昏瞀人曰く，「奚に方りてか反れる」と。

曰く，「吾驚けり」と。

曰く，「悪くんぞ驚ける」と。

曰く，「吾嘗て十漿に食せしに，五漿先づ饋れり」と。

伯昏瞀人曰く，「是の若くんば，則ち汝何爲れぞ驚けるや」と。

曰く，「夫れ内誠にして解らざれば，形謀らかにして光を成し，以て外人の心を鎮むれば，人をして老を貴ぶを輕んぜしめて，其の患ふる所を肇さん。夫れ瞀人は特だ食羹の貨をなし

て、多餘の贏爲し。其の利爲るや薄く、其の權爲るや軽くして、而るに猶ほ是の若し。而るを況んや萬乘の主に於てをや。身は國に勞^{つか}れて知は事に盡く。彼將に我に任ずるに事を以てして、我に效らかにするに功を以てせんとす。吾是を以て驚く」と。

伯昏瞀人曰く、「善いかな 觀ること。女 處らんか、人將に女を保たんとす」と。

幾何も無くして往けば、則ち戶外の屨 滿てり。

《譯文》

列子は齊に赴いたが、途中で引き返してきたところ、思いがけず伯昏瞀人に出會った。伯昏瞀人は、「どうして途中で引き返してきたのか」と尋ねた。

（列子は）「私はびっくりしたのです」と答えた。

（それに對して伯昏瞀人は）「どうしてびっくりしたのだ」と尋ねた。

（列子は）「私は以前十軒ほどで飲み食いしたのですが、（そのうち）五軒では（他の客を差し置いて）真っ先に（私の所に食事を）運んできたのです」と答えた。

（それに對して伯昏瞀人は）「そのくらいのことです、どうしてお前はびっくりしたのだ」と尋ねた。

（列子は）「誠實に修養を怠らなければ、身體もしっかりして輝きを放つようになります。その調子で人々の心を威壓していると、年長者を敬う氣持がないがしろになって、困った事態を引き起こしてしまうのです。あの茶店の主人なんて、ただ食べ物・飲み物を作って、大して儲けがあるわけでもありません。財力も乏しければ、權力も弱いという身で、私をこのようにもてなしたのですから、齊のような萬乗の大國の君主ともなれば、どんなことをしてくれるか分かったものではありません。身體は國政のために疲れ果て、知恵は國事のために使いきっているとあっては、齊の君主は私に國事を受け持たせ、功績を挙げさせようとするでしょう。こう考えてきて、我ながらびっくりしてしまったのです」と答えた。

（それに對して伯昏瞀人は）「目の付け所はなかなかだ。お前が自分の家にいたところで、頼ってくる者は（たくさん）いるだろうな」と言った。

それから間もなく、伯昏瞀人が列御寇の家をたずねてみると、戸の外に脱いだ弟子たちの靴が置き場所に困るほど（いっぱい）になっていた。

「列禦寇」篇の冒頭の文章の引用は、伯昏瞀人と列子との對話である。引用は書き出しのごく一部に限られているため、原典に当たらないと全體の意味をつかむことはできない。また當該箇所の後にも文章は續き、最後に「腹一杯食べて氣ままに遊び、波間を漂うロープの切れた小舟のように自分を虚しくしてまた氣ままに遊ぶだけだ」と伯昏瞀人の言葉で締めくくっている。蘇東坡は或いはその一文に二つの説話を纏められると考えたのかもしれない。確かに二つの説話は、師匠（或いはそれに相應する人物）と弟子の對話として展開している點が共通している。しかし、先に挙げた「寓言」篇の引用では、「びくびくきよろきよろしながら他人の機嫌を何うのを改め、體面を汚されても氣にしない、少し足りない人に見える位の態度で望むことによって、ごく短期間のうちに人々が本心で接してくれるようになった」のに對して、「列禦寇」篇の冒頭の文章では、「誠實に修養を怠らなければ、身體もしっかりして輝きを放つようになる。その調子で人々の心を威壓していると、年長者を敬う氣持がないがしろになって、困った事態を引き起こしてしまう」とある。どちらの説話も道の修得の仕方に問題があることを説いているが、その道を修得する過程と得られた結果は全く異なっている。また、途中で師匠に會い、道の習得に意見されるという點では同様のモチーフを用いているが、「寓言」篇では、老子と陽子居との對話、「列禦寇」篇では、

齊伯昏瞀人と列子との對話となっており、それぞれ対象が異なっている。『莊子』書中では、同じモチーフを扱っている類似する説話は多く見られるので、別段注視すべきことでもないが、むしろ扱っている対象や思想的背景が異なることの方が、問題である。例えば、同じモチーフを用いて描かれている大椿の精霊の登場する説話は、繰り返し登場するが、それほど問題視されない。ここで蘇東坡は、安易に二つの背景の異なる説話を結びつけようと考えているが、その考えはそもそも短絡的で、注意を要するものである。さらに、「寓言」篇の引用では、ごく短期間のうちに人々が本心で接してくれるようになったという結論が有り、説話の展開上、一応の解決を得ているように見える。無理矢理「列禦寇」篇へと繋げる必要はどこにもないのである。

以前、拙稿「莊子の對話の説話について」の中で、莊子-弟子・莊子-恵子といった對話形式の説話を分析した。分析の結果、莊子書を權威づけるために各篇を彩る豫定で分散させた説話は、何らかの理由で編纂を断念することとなり、特定の篇に束ねるような形で残った。そして、換骨奪胎した説話が諸篇に見られることから、「莊子-弟子」「莊子-恵子」といった對話形式の説話は、編纂し直して「寓言」篇までの各篇の篇末に分散して置く豫定があったのかもしれない、と結論付けた。加えて、「寓言」篇より後に、(幾つかの説話をまとめる必要のない)比較的長文の劇場型の説話が續いているが、全体の序文のような働きをしている「列禦寇」篇を最後に付けて、纏める豫定だったものの、そのまま何らかの事情で編集者は手を止めてしまった可能性があるかと推察した。つまり、「寓言」篇や「列禦寇」篇は全体の序文や後序の役割を果たしていたとする學者もいるが、単純に説話が未整理のまま放置されている状況から、そう見えてしまうことにも一理あるのである⁸⁾。

「寓言」篇の篇末にある老子と陽子居との對話の説話が篇末に置かれているのは、對話形式の説話を編纂し直して篇末に置くという上記の理由によるものであり、齊伯昏瞀人と列子との對話の説話が冒頭に置かれているのは、単純に同様のモチーフで描かれた説話が未整理のまま放置されていたからに他ならない。蘇東坡は、「寓言」篇と「列禦寇」篇の説話を繋げることで結論を得たように表現しているが、比較的長文の劇場型の説話四篇が、本来一つの説話であったものの間に無理矢理捻じ込まれたという意見は、少々無理があるようである。

(3) 「楚公子微服出亡、而門者難之」の典據

「莊子祠堂記」の②では、「漁父」・「盜跖」・「舛篋」等の文章を作って、孔子の仲間を誹謗し、老子の教義を明らかにしようとしたというのは、粗雑な見方だとする。そして、莊子は孔子を助けた人であって、孔子を手本にすることができなただけなのだと言っている。「楚公子微服出亡」で始まる文章は、その論據となる大變重要な部分である。しかし、実際に典據について調べてみると大いに問題があることがわかる。

當該部分については、蘇東坡以前の文獻に当たってみても、管見の及ぶ限りでは、見つけることができない。後世の文獻では、趙翼(一七二七年～一八一四年)の『陔餘叢考』卷四十「事急爲僕隸免禍(事態が非常に差し迫っているさま)」の項目に、『左傳』を典據として、次の文が載せられている⁹⁾。※波線を引いた部分はすべて、「莊子祠堂記」と共通の記述がなされている箇所である。

『左傳』：楚公子遇國難，微服出亡，將及門，守門者難之。其僕操箠擊公子背，罵曰，「隸也不力，何不早出」。守門者不疑，竟出。

《書き下し文》

楚の公子 國難に遇ひ、微服して出で亡れ、將に門に及ばんとし、門を守る者之を難んず。

其の僕 箠を操り公子の背を撃ち、罵りて曰く、「隸や力めず、何ぞ早く出でざる」と。門を守る者疑はず、竟に出す。

《譯文》

楚の國の公子は國の危難に遭遇し、(人目につかないように)身分の低い人の服装をして出奔したが、いまにも門にたどり着きそうになったところで、門番が公子を難詰した。(すると)公子の召使は(公子に)鞭を振り上げて公子の背中を打ち付け、「家來のくせに、家來らしくしていない。どうしてさっさと門から出ていかないのか」と罵った。(すると)門番は疑うことなく、最終的に彼らを外に出したのだった。

この文章は、「莊子祠堂記」よりも詳細に記述されている。『陔餘叢考』は、『左傳』を典據としているので、一見すると『左傳』から引いているように思われる。また、「事態が非常に差し迫っているさま」を描いた他の説話の典據として擧がっている『公羊傳』・『漢書』・『三國志』・『通鑑』・『南史』・『北史』の文章に当たってみると、原典をいずれも省略した形で載せていることが分かる。それに対して、『陔餘叢考』卷四十「事急爲僕隸免禍」の冒頭に擧げられている「楚公子微服出亡、而門者難之」の典據だけは、全文のみならずさらに筆を加えた形で載せられている。また、『左傳』はもとより、どの先行する文獻にも当該部分に關する手がかりを見つけることはできない。尤も、同時代以降の作品の中には、「莊子祠堂記」の文章、或いは蘇東坡の文章としてその一部、乃至ほぼ全文を引用している文章もみられる。中でも蘇東坡同様、莊子について四篇を疑っている弟の蘇轍(一〇三九年～一一一二年)には『古史』という作品があり、その『古史』卷三十三「撰老子列傳第十」には、兄の蘇東坡の意見であると断りながらも、『陔餘叢考』所収の文章と全く同じ、加筆された一文が載せられている¹⁰⁾。このことから推測すると、『陔餘叢考』が引いているのは『左傳』ではなく、『古史』であると考えて略々間違いないと思われる。しかし、兄の意見であると断っている「楚公子微服出亡、而門者難之」については、蘇轍の文章以外に手がかりが見つからない以上、現時点では蘇東坡が「寓言」を演出するために、創作したのではないかと考えるのが自然であろう。

二. 「莊子祠堂記」に於ける論點

(1) 『莊子』に於ける孔子批判

「莊子祠堂記」は①で見たように、莊子の祠堂建立を記念して書かれている。そのような性質上、莊子の文章について偽作であるとか、削るべきだといった意見については直接述べていない。しかしながら、先に擧げた②の中で、蘇東坡は「その著書は十餘萬言に及んだが、おおむね全て寓言である。〈漁父〉・〈盜跖〉・〈胠篋〉等の文章を作って、孔子の仲間を誹謗し、老子の教義を明らかにしようとしたと有るが、莊子に對する粗雑な見方でしかない。莊子はやはり孔子を助けた人であって、ただ孔子を手本にすることができなかつただけだ」と述べている。また、莊子の四篇については、「愚か者が四篇を盗み取って列御寇篇の冒頭に加えた」と述べ、『莊子』は寓言によって孔子を評価しているのだと説明するために、わざわざ『莊子』に假託した説話を利用して

また、「寓言」「列御寇」どちらの篇の説話も、「道の修得」には至っておらず、不完全な終わり方をしている。蘇東坡が寓言を、人物や事物に假託し逆説的な表現によって、一見諷っているように見える物でも、實は反對に持ち上げているのだと解釋し、孔子が批判されている各篇の説話を辨護しようとしているのであれば、かなり無理があるのではないか。陽子居と列子を孔子に置

き換えてみれば、それは自ずと明らかになる。貧弱な終わり方をさせられた孔子では、いくら道の體得を目指す求道者の姿であるとしても、あまりにも惨めな描かれ方である。人や物に假託するのが寓言の特質であるにせよ、それがシニシズムの表現にまで及んでいると、蘇東坡が考えているとするならば、それは大きな誤りである。『莊子』書中には、本當に辛辣に孔子を諷っている説話や、孔子を持ち上げている説話等、様々な形態が見られるからである。

『莊子』に於ける孔子の説話については、石本裕之が『孔子の中の莊子』書中で、非常に細密な分析を加えている。石本によると、『莊子』に最も多く登場する人物は孔子であり、現行『莊子』書全三十三篇に費やされる總字数は、續古逸叢書本によると六萬五千二百十三字、段落ごとにみると長短併せて二百餘條を数えるが、そのうち孔子の登場する記事は五十二條に及び、優に二萬字を越える。五十二條は、莊子の登場する記事が三十一條、莊子の論敵である恵子の登場する記事が十二條、老子の登場する記事が十六條（そのうち孔子との問答が七條）であることと比較すれば、この数がいかに多いものであるか知られるということである。また、『莊子』に登場する孔子の記事は量的にも、形式的にも多彩で、ほとんど混沌の様相を呈している。中には確かに孔子を難じ貶めるものもあるが、他にもさまざまな形態・内容の説話があって、孔子本来の姿や思想を容認、或いは稱賛する記事も見受けられるとも述べている。そして孔子の説話については、全體をその形式によってⅠ～Ⅴ類に分類し、評価を加えている¹¹⁾。※一覽の見方については、注を参照¹²⁾。

石本の分析では、内篇では、「齊物論」の文章は、対象が孔子ではない可能性もあるが、「人間世」・「徳充符」の各篇では孔子を諷っている文章が含まれている。そして、孔子を批判している篇は内篇・外篇・雜篇と幅廣くみられる。また、蘇東坡が対象にしている四篇の中には、「盜跖」・「漁父」は當然含まれているが、蘇東坡が「寓言」篇から直接繋げた「列御寇」篇にも孔子を諷っている文章が含まれていることから、蘇東坡の考えには矛盾を生じている。以上のことから、蘇東坡が「莊子祠堂記」で「莊子は孔子を助けた人であって、孔子を手本にすることができなかったのだ」というのは、極めて一方的な意見であることが分かる。

(2) 『史記』及び編纂者への批判

「莊子祠堂記」は、司馬遷について、「謹んで」と前置きで謙遜の態度を示しながらも、莊子に對して粗雑な見方をしていると疑義を呈している。そして何より、締めくくりに「愚か者が四篇を盗み取って文章に加えた」・「全てについて、まとまった一區切りごとに分け、各篇に名前を付けたのは、皆揃って世間の俗人から出たのであって、莊子の本意ではない」というように、暗に莊子の編纂者に対する人物批判にも繋がる評価を下している。しかし、「莊子祠堂記」の中で実際に批判されているのは「盜跖」・「漁父」・「讓王」・「説劍」の四篇だけであり、本當に孔子を否定しているような内容や、見聞が狭く單純で深遠な道にそぐわないと蘇東坡自身が判断したものだけが対象になっている。

また、『史記』「莊子列傳」には、後半に「〈畏累虚〉・〈亢桑子〉之屬、皆空語無事實。然善屬書離辭、指事類情、用剽剝儒・墨、雖當世宿學不能自解免也」と痛烈な一文があるにも関わらず、蘇東坡は特に「畏累虚」・「亢桑子（庚桑楚）」についての二篇については論究していない。

恐らくその原因は、「寓言」篇を「列御寇」篇に繋げ、その間に置かれた四篇を莊子らしくないとして扱うことで手一杯になってしまったからだけではない。蘇東坡に寓言に基づき抽象的な事柄を具體的な事物になぞらえて纏めると認められたからであり、「皆空語無事實」という戯曲的傾向をもった説話を表現した語句よりも重視したからである。

そして、『史記』には最後に、「楚の威王が、莊周にたくさんの贈り物をし、宰相に据えようとしたところ、犠牲の牛のように生きたくない。束縛されることなく自由に生きたい」旨、記述されているものの、この点についても蘇東坡の言及は一切ない。政治的野心を示すことのなかった莊子の物語としては、格好の材料になり得る題材ではあるが、政治家としても手腕を發揮した蘇東坡にとって、政治的無關心は忌み嫌うべき事であっただろうから、敢えて觸れていないのだと思われる。それに對して『史記』の記述の中には、莊子の政治的無關心を示す説話が挿入されている。それだからこそ司馬遷は、佐藤明の言葉を借りれば、「司馬遷の認識している劇場型の莊子説話」として、政治性を含んだ「讓王」・「説劍」といった名前を、『莊子』らしくないとして、敢えて挙げなかったのではないか。そして、蘇東坡は『史記』が取り上げていない「讓王」・「説劍」二篇を、別段特に考えを及ぼすことなく、「漁父」・「盜跖」同様、『莊子』らしくない劇場型の説話として、躊躇なく外したのだろう¹³⁾。

なお、「莊子祠堂記」最後の一文にある「世俗」は、俗世間の意味で使われるが、前半で歴史家司馬遷（『史記』）を批判していることから、ここでは宮中の全ての書物の校訂を行ったとされる劉向（紀元前七七年～紀元前六年）・劉歆（？～二三年）親子や、現行本『莊子』の編纂者である郭象（二五二年？～三一二年）らを対象に、世間の俗人として莊子の編纂・校訂を行っていった者たちを批難している文章として解釋した。

まとめ——「莊子祠堂記」が果たした役割と問題點——

池田知久は、「韓愈・蘇軾以來形成されてきた外篇・雜篇に對する輕視、内篇・外篇・雜篇を構成する逍遙遊・齊物論・駢拇・庚桑楚などの部立て、などといった舊來の形式上の枠組みのすべてを自由に批判の對象としつつ、各篇各章の内容を可能な限り正確に讀解・分析することを通じて、それらに代わって新たにこの學派の淵源・發生・系統・類別・展開などを體系的總合的に論じたい」と述べているが、もっともな意見である¹⁴⁾。

「莊子祠堂記」にて、蘇東坡は四篇だけについて言及するが、ここまで詳細に見てきたように、非常に短絡的な理由によって、『史記』や編纂者を批判している。しかし韓愈（七六八年～八二四年）および蘇東坡が引き金になって、今日に至るまでテキストを疑う動きは際限なく廣がり、内篇以外はすべて莊子の自著でなく、後學者の手になると考える者が現れたり、別の思想の混入と見なすようになった¹⁵⁾。そして今日、莊子を取り扱う研究者の間では、『莊子』は一人の手による物ではなく、多くの夾雜物を集めつつ出来上がった物だと考えられている。孔子の説話についても混沌としており、政治思想についても含まれていないわけではない。そして、蘇東坡が問題視する四篇に焦點を絞ると、「孔子に對する褒貶」・「莊子の思想として淺陋かどうか」に論點が置かれてきた嫌いがある¹⁶⁾。

一方、夾雜物に論點を置いているのは、近人の關鋒・羅根澤や福永光司といった學者であり、『呂氏春秋』や楊朱・儒家思想への傾倒、「宰相」・「刑德」等の語句の使用例といった側面から、蘇東坡の四篇に對する意見を支持している。確かに『莊子』内篇の思想と距離を置く夾雜物を含んだ四篇は、同じ括弧に括ることは可能かもしれないが、『莊子』は各時代の思想的背景を基に再編成され、パラフレーズされた上で重層的に織りなされているので、類似する夾雜物を含んでいるのであれば、なおさら他の諸篇の中に現れている類似する夾雜物との比較や思想史的な檢討が必要である。

また、『莊子』は編纂者により編纂された書物であり、四篇が纏めて置かれているのにも意圖す

るところがあるとする蘇東坡の見立ては間違っておらず、先見の明がある。二字で構成されている『莊子』の外・雑篇は、總論や後序、思想史といった側面からなる篇を除けば、外・雑篇の多くの篇は、大なり小なりのまとまった括弧で括ることが出来るからである。

しかし、先に述べたように、雑篇の冒頭には『史記』にも取り取り上げられている「庚桑楚」と「徐无鬼」が置かれているが、蘇東坡は司馬遷を批判しているにもかかわらず、それに続く四篇との関係について一切触れていない。

福永も「資料的・内容的な限界性に充分注目しておきたい」と断っているように、他の諸篇との比較や思想史的研究にはまだまだ余地を残していると思われる¹⁷⁾。兎も角も「それぞれの篇の中には「今一度、内・外・雑篇にとらわれた枷を取り拂って、純粹に思想史的研究をしていくことに大きな意義があり、その動機を提供した蘇東坡の「莊子祠堂記」には、大きな功績がある。特に「莊子祠堂記」で、「『莊子』書をまとまった一區切りごとに分け、内容による分類や配列を行ったのは、世間の俗人から出たのであって、莊子の本意ではないのだ」と述べていることは、今日の視点から見ても卓見である。そのような蘇東坡の批判精神は、大いに汲むべきであり、凝り固まってしまった固定観念は取り拂わなければならない。

以前、拙稿「莊子の對話の説話について」において、篇名のつけられ方を、陸徳明の『經典釋文』を参照して一覽として示した。中でも雑篇の「庚桑楚」二十三、「讓王」二十八、「盜跖」二十九、「説劍」三十、「漁父」三十一は、他の外篇の書き出しが、二字か三字の語句によって篇名がつけられているのに對し、これら五篇は事柄や名稱によって名付けられていた¹⁸⁾。

雑篇の「庚桑楚」については、雑篇の冒頭に納められている。そして、次の「事柄や名稱によって名付けられている篇」は「讓王」であり、蘇東坡が取り去るとどうなるか考えた問題の劇場型の説話が四篇纏めて續いている。しかし、蘇東坡の考えとは反對に、「庚桑楚」から「讓王」に挟まれた「徐无鬼」二十四、「則陽」二十五、「外物」二十六の三篇について、編纂者が劇場型の説話に仕立て上げ、事柄や名稱によって篇名を付けるために、それぞれの篇の中に幾つかの類似する説話を納めて、とりあえず置いておいたものの、前漢末の混亂の中、そのままになってしまっているのだとしたらどうだろうか。司馬遷の意向を汲んだ、編纂者——恐らく前漢末の劉向・劉歆親子——によって、雑篇は劇場型の説話を中心に纏め上げられようとしていた可能性もある。

佐藤明は勞作「司馬遷の見た『莊子』」の中で、「胠篋」・「畏累虚」・「宥桑子」について次のように纏めている¹⁹⁾。

胠篋篇は形式としては論説文であり、駢拇・馬蹄・在宥篇とは、「自三代以下」という表現が繰り返されたり、曾・史・楊・墨・離朱・師曠・盜跖の名がしばしば出てくるなど共通点が多く、これらの篇と非常に近い関係にあるといえる。このように見ると胠篋篇は、形式的には盜跖・漁父・庚桑楚の三篇とは隔たりがある。しかし内容的には、盜跖篇とかなり近い関係にある。胠篋篇は「泥棒を防ごうとする小賢しい知恵が、かえって大盜賊を利することになる。」という奇抜な發想で始まり、論はやや多岐に涉っているが、その主張の中には、「聖人が出れば同時に盜賊も出るし、また盜賊にもそれ相當の理がある。」ということ述べた部分が含まれる」。『史記』の「作漁父・盜跖・胠篋、以詆訾孔子之徒、以明老子之術。畏累虚・宥桑子之屬、皆空語無事實」とある中で、現在の『莊子』にない畏累虚は除くとしても、漁父・盜跖・宥桑子（庚桑楚）には、「長編の戲曲的傾向をもった説話」という点で共通性が見られ、胠篋篇も盜跖篇に近い関係があり、そのためか、あるいは盜跖という言葉からの連想で胠篋を擧げたとすれば説明がつく。もちろん現在の漁父・盜跖・胠篋の三篇は「以詆訾孔子之徒、以

明老子之術」という評語に當てはまるし(肱篋篇には地の文を含めて、かなりの部分で『老子』と一致する記述がある)、庚桑楚篇も「空語無事實」という評語に當てはまる。・・・しかし、全體を通じて見た場合、特に列傳を中心にして、そこに描かれている記事が単に客観的な事實關係をのみ述べたものではなく、ある程度説話化されたものであることは異論がないことであろう。・・・さらにつっこんで先の『莊子』漁父篇等でみた戯曲性という立場から『史記』を考えた場合どうなるであろうか。以上まとめると、『史記』には戯曲的構成を持った部分があり、その戯曲性は司馬遷自身の嗜好と考えられるということになる。とするならば、そのような司馬遷にとって、『莊子』の中で「長編の戯曲的傾向をもった説話」という点で、漁父・盜跖・宄桑子(庚桑楚)の諸篇が特に印象に残ったとしても決して不思議ではないのである。司馬遷が漁父以下の諸篇を『莊子』より連想したことは、『史記』を著述した司馬遷の態度と考え合わせた場合、納得のいく所である。

以上の説明により、「肱篋」・「畏累虚」・「宄桑子」に關しても、「漁父」・「盜跖」同様、「長編の戯曲的傾向をもった説話」として分類すべきことが理解できる。

なお、『史記』の擧げている外篇の「肱篋」は、佐藤氏のいうように論説文であり、劇場型の説話ではない。しかし、扱っているテーマは、劇場型の説話としてピックアップされている「盜跖」と同じ大泥棒である。恐らく、司馬遷はそのテーマに惹かれて、「盜跖」と「肱篋」を引き合いに出したのではないだろうか。

この問題については、生憎まだ十分に材料が出そろっていないので、今すぐに纏めていくことは困難であるが、近時「莊子列傳」に關連する研究には、天野鎮雄・松村健一等の優れた研究があるので、これらと併せて外・雜篇の構成について研究を進めていきたい²⁰⁾。また、『史記』「老莊申韓列傳」について、老・莊と申・韓とが併稱されているのは、漢初の黄老思想が大きな影響を與えていると思われる。『史記』所収の司馬談「六家要旨」に描かれている六家の統合と「老莊申韓」と併記されている「老子韓非子」列傳の關係も未解決のままである。今後、機會が許せば蘇東坡の扱った四篇それぞれの繋がりと併せて考察を進めていきたい。

注

- 1) 蘇軾は、白居易が白樂天と稱される事の方が多いように、日本では號の東坡が通名となっていることから、これ以後蘇東坡と表記していく。
- 2) 池田知久は、蘇東坡以降の『莊子』外篇・雜篇が、例外なくすべて莊子の自著でないとする説に結びついていく流れについて、「第3節『莊子』の内篇・外篇・雜篇」の注(16)の中で、次のように纏めている。元代には、呉澄が駢拇・肱篋・馬蹄・繕性・刻意の五篇を疑い、明代に入って、羅勉道が讓王・説劍・漁父・盜跖・刻意・繕性の六篇を疑い、また鄭瑗が讓王・盜跖・説劍・馬蹄・肱篋の五篇を疑うなどのように、時代の進展とともに外篇・雜篇への疑問・批判は激しさを増していった。そして、明代後期になると、ついに朱得之・李贄・焦竑の出現を見て、外篇・雜篇は全面的に否定されるに至る。その後、清代になって、外篇・雜篇が例外なくすべて莊子の自著でないとする説は、王夫之・林雲銘以下の多くの研究によって廣く定着するようになる。さらに、最近の世界の學界では、外篇・雜篇が莊子の自著でないことを前提にして、外篇・雜篇凡そ二十六篇全體の類別や、内篇七篇と外篇・雜篇凡そ二十六篇との系統づけなども行われている。池田知久『道家思想の新研究—《莊子》を中心として』汲古書院、2009年、90頁。
- 3) 同書、55頁。池田知久は、「第3節『莊子』の内篇・外篇・雜篇」の本文の中で、次のように説明している。蘇軾が四篇を削った理由は、主に以下の二つである。第一に、莊子は孔子を助けようとしていた人であるから、それとは反對に孔子を「眞に詆つ」ている「淺陋にして道に入らざ」る内容の四篇は、莊子自身の作ではありえないということ。第二に、寓言篇の末章と列御寇篇の首章は同じモチーフを

取り扱った一つの文章で、莊子の言葉も寓言篇の末尾では完結しておらず、だから兩者の中間にある四篇は、後世の愚か者が自分の文章を竄入させたものであるということ。以上の理由を挙げて蘇軾が四篇を削った以後は、今日に至るまで追隨者・支持者が陸續と世に現れて、右の四篇を後世の偽作とする評價が定まり、さらに疑問が新たな疑問を呼び、批判が新たな批判を招いて、最後には内篇以外は雜篇だけでなく外篇もすべて例外なく莊子の自著でないとする通説が形作られるに至った。

- 4) 蘇軾著・孔凡禮點校 中國古典文學基本叢書『蘇軾文集（第二冊）』北京中華書局，1986年初版，1992年第三次出版，347頁。

「縣令 秘書丞王兢」は、『商丘縣志』卷之五「清康熙四十四年」の條に、「宋 宋城令 王兢 仕至秘書丞」とある。また、『蘇軾全集校注』第十一卷所収「莊子祠堂記」は「王兢，字彥履，鄧州穰縣人。嘉祐進士。歷峽州戶參・宋城縣令，官至左朝請大夫。事具畢仲游」と『西臺集』卷十三「左朝請大夫致仕王公墓誌銘」を注引する。張志烈・馬德富・周裕鏞主編『蘇軾全集校注』第十一卷，河北人民出版社，2010年。商丘縣志編纂委員會編『商丘縣志』，三聯書店出版，1991年。『文淵閣四庫全書』第1122卷所収『西臺集』卷十三，商務院書館（臺灣），1986年，171-173頁。

- 5) 漢 司馬遷撰『史記（第七冊）』北京中華書局，1959年，2143-2145頁。

- 6) 郭慶藩撰 新編諸子集成『莊子集釋』北京中華書局，1961年，962-964頁。

池田知久は、當該文章が書かれたときに、老子が成立していたかどうかは分からない、とするが、ここでは老子の影響を受けた文章として捉え、「徳」の譯語に「道の働き」を當てた。池田知久『莊子下』講談社學術文庫，2014年，721頁。

- 7) 前掲『莊子集釋』1036-1041頁。

- 8) 水野厚志「莊子の對話の說話について」—莊子と恵子・莊子と弟子を中心に—東京国際大學論叢 人文・社会学研究 第五號，2020年，21頁。

- 9) 趙翼（撰）曹光甫（校點）『陔餘叢考』上海古籍出版社，2011年，1164-1165頁。

- 10) 王雲五（撰）『四庫全書珍本三集』所収『古史』臺灣商務印書館，1972年。

- 11) 孔子說話の量の多さとその内容について、石本氏の著書の参照箇所は次の通りである。

「莊子」に最も多く登場する人物は孔子である。現行「莊子」書全三十三篇に費やされる總字數は、續古逸叢書本によるときには六萬五千二百三十三字といい、これを段落ごとみにみると長短併せて二百餘條を數えるが、そのうち孔子の登場する記事は五十二條に及び、試みにその文字を數えれば優に二萬字を越える。五十二條という數は、特定の人物が登場する記事としては斷然に多い。例えば莊子の登場する記事が三十一條、莊子の論敵である恵子の登場する記事が十二條であり、また「老莊」と併稱されるごとく「莊子」と深い関わりを持つとされる老子の登場する記事が十六條（そのうち孔子との問答が七條）であることと比較すれば、この數がいかにも多いものであるか知られるであろう。——中略——莊子の思想の本質が老子の學に歸着するとか、寓言に満ちた諸篇を作り孔子學派を誇ったという敘述は、『莊子』書の性格をある程度正しく傳えているものと思われる。『史記』以來、一般に、莊子は自説を強調せんがために儒家の大宗たる孔子を利用したと見られているようである。簡単にいうと、孔子を揶揄し愚弄することによって、所謂道家思想の優位を示そうとしたという見方である。だが、『莊子』に登場する孔子の記事（以下、これを「孔子說話」と總稱する）は量的にも、形式的にも多彩であり、ほとんど混沌の様相を呈している。中には確かに孔子を難じ貶めるものもあるが、他にもさまざまな形態・内容の說話があつて、孔子本來の姿や思想を容認、或いは稱贊する記事も見受けられるのである。石本裕之『孔子の中の莊子』響文社，2005年，101-102頁。

- 12) 同書，113-121頁。

石本氏は、「莊子」における孔子說話をその形態の違いによって五種類に分類している。なお、ここで挙げている文章・一覽表は、わかりやすく表現・表示するために、執筆者の判断により、簡便な表記に書き換えてある。

内と有るのは内篇，外と有るのは外篇，雜と有るのは雜篇の文章である。◎は孔子に對する讚辭を，●は孔子に對す貶辭を，○はどちらともつかない評價を示している。孔子像分類の下の「」内は、それぞれの說話に對して石本氏が内容に從つて付けた見出しであり、（）内はその說話が屬する「莊子」の篇名で、下のローマ數字は同一篇中の掲載順を表す。（……）以下は、說話の登場者たちの名であるが、二者間の直接對話の場合、左に位置する者がその人物關係における上位者或いは話し手に當たり、

右に位置する者は下位者或いは聞き手であることを示している。同一説話に出る同一人物の他の呼称はすぐ下の括弧内に記してある。

I (孔子が話題の対象になっている説話)

- 内○「聖人譲而不辨」(「齊物論」I) ……聖人(孔子?)
- 内●「丘也與女皆夢也」(「齊物論」II) ……瞿鵠子・長梧子・丘(孔子?)
- 外●「顔淵問師金」(「天運」I) ……孔子・顔淵・師金
- 外●「河白・北海若問答」(「秋水」I) ……河白・北海若・仲尼・伯夷
- 外○「莊子見魯哀公」(「田子方」IV) ……莊子・哀公・一丈夫(孔子?)
- 雜○「仲尼之盡慮」(「則陽」I) ……湯・登恆・仲尼・容成氏
- 雜○「莊子謂惠子曰」(「寓言」I) ……莊子・惠子・孔子
- 雜●「子張・滿苟得問答」(「盜跖」II) ……子張・滿苟得・無約・仲尼・墨
- 雜●「魯哀公問仲尼乎顧闚」(「列御寇」I) ……魯哀公・顧闚・仲尼

II (他者が孔子に發言している説話)

- 内●「楚狂接輿遊孔子門」(「人間世」III) ……孔子・狂接輿
- 内●「魯有兀者叔山無趾。踵見仲尼」(「德充符」II) ……叔山無趾・仲尼(孔子)・老子
- 外○「孔老問答i」(「天地」I) ……夫子(丘)・老聃
- 外●「孔老問答ii」(「天道」) ……孔子・子路・老聃
- 外●「孔老問答iii」(「天道」II) ……孔子・老聃(老子)
- 外○「孔老問答iv」(「天運」III) ……孔子・老聃・子貢
- 外○「孔老問答v」(「天運」IV) ……孔子・老聃(老子)
- 外○「仲尼見痾僕者承蜩」(「達生」I) ……仲尼・痾僕者
- 外○「孔子觀於呂梁。見一丈夫游」(「達生」IV) ……孔子・一丈夫
- 外○「孔子圍於陳蔡之間」(「山木」I) ……孔子・太公任
- 外○「孔子問子琴」(「山木」II) ……孔子・子琴
- 外○「孔老問答vi」(「田子方」III) ……孔子・老聃・顔回
- 外○「孔老問答vii」(「知北遊」I) ……孔子・老聃
- 雜○「仲尼問衛靈公」(「則陽」III) ……仲尼・大叟・伯常蹇・狝韋
- 雜●「老萊子遇仲尼」(「外物」I) ……老萊子・其弟子・仲尼
- 雜●「孔子・盜跖問答」(「盜跖」I) ……孔子・柳下季・盜跖・顔回・子貢
- 雜●「孔子・漁父問答」(「漁父」) ……孔子・漁父・子貢・子路・顔淵

III (孔子が他者に發言している説話)

- 内○「心齋問答」(「人間世」I) ……顔回・仲尼
- 内○「葉公子高將使於齊。而問於仲尼」(「人間世」II) ……葉公子高・仲尼
- 内○「坐忘問答」(「大宗師」III) ……顔回・孔子
- 外○「孔子遊於匡。弦歌不憊」(「秋水」III) ……孔子・子路
- 外○「顔淵東之齊。孔子有憂色」(「至樂」) ……顔回・孔子・子貢
- 外○「孔子窮於陳蔡之間」(「山木」III) ……孔子・顔回
- 外○「顔淵曰。夫子步亦步」(「田子方」II) ……顔淵・仲尼
- 外○「冉求問仲尼曰。未有天地可知邪」(「知北遊」II) ……冉求・仲尼
- 外○「顔淵問乎仲尼曰。敢問其遊」(「知北遊」III) ……顔淵・仲尼
- 雜○「曾子再仕而心再化。仲尼曰」(「寓言」II) ……曾子・仲尼
- 雜○「孔子謂顔回曰。胡不仕乎」(「讓王」I) ……孔子・顔回
- 雜○「孔子窮於陳蔡之間」(「讓王」II) ……孔子・顔回・子路・子貢

IV (孔子が他者に發言している説話) に他者が介在している説話)

- 内○「魯有兀者王骀」(「德充符」I) ……王骀・常季・仲尼
- 内○「魯哀公問哀駘它於仲尼」(「德充符」III) ……魯哀公・仲尼・哀駘它・閔子
- 内○「子桑戶死」(「大宗師」I) ……子桑戶・孟子反・子琴張・孔子・子貢
- 内○「顔回問孟孫才乎仲尼」(「大宗師」II) ……顔回・孟孫才・仲尼

- 外○「子貢見漢陰丈人」(「天地」Ⅱ)……子貢・丈人・孔丘(孔子)・渾沌氏
外◎「顔淵見津人操舟若神」(「達生」Ⅱ)……顔淵・操舟者・仲尼
外○「仲尼見温伯雪子而不言」(「田子方」Ⅰ)……温伯雪子・魯人・仲尼・子路
外○「文王見臧丈人釣。仲尼曰」(「田子方」Ⅴ)……文王・臧丈人・顔淵・仲尼
雜◎「丘也聞不言之言」(「徐無鬼」)……仲尼・楚王・孫叔敖・市南宜僚
雜●「孔子之楚。有市南宜僚」(「則陽」Ⅱ)……孔子・子路・市南宜僚
Ⅴ(孔子が話題の対象になっている説話)
外◎「田開之見周威公。仲尼曰」(「達生」Ⅲ)……田開之・周威公・祝賢・仲尼
外○「肩吾問孫叔敖。仲尼聞之曰」(「田子方」Ⅳ)……肩吾・孫叔敖・仲尼
雜◎「宋元君夜半而夢。仲尼曰」(「外物」Ⅱ)……宋元君・仲尼
雜◎「孔子曰。凡人心險於山川」(「列御寇」Ⅱ)……孔子

全體では、◎は計23條、●は計13條、○は計16條となった。この數値は解釋によって若干ズレが生じようが、差し当たり、次のようなことは言えるであろう。Ⅰ・Ⅱ類において、孔子を貶する●の存在が目立つということは、「莊子」において孔子が話題の対象となったり、會話における聞き手となったりする場合には、孔子が貶せられることが多い、ということを示している。孔子が陰口を叩かれたり、或いは罵倒されたりするケースである。一、時に聖人・至人として語っている。方、孔子が話者となるⅢ・Ⅳ・Ⅴ類で孔子は、時に「道」を解説し、Ⅰ・Ⅱ類においては、儒家の立場に立つ孔子が道家の聖人たちに話題にされたり、またはその孔子が彼らに對して仁義の道を説き、または質問する、という形で説話が展開されており、一部を除いては孔子が仁義の道に縛られている姿を描出している。

これに對してⅢ類では、莊子が自己の思想を孔子に語らせるべく、問答において孔子を上位者に位置づけるように設定された説話もあるが、『論語』の記事との關連が深い説話も多く、孔子本來の姿を描いて、しかも孔子を稱する◎が多數を占めることとなっている。

また、Ⅳでは、孔子自身は儒家の立場に立っているが、他者に對して無爲自然の道を十分に説明できる人物として登場することが多く、従って、孔子を稱賛するのでも貶するのでもない○の存在が目立つ結果となっている。

要するに、孔子を話題に上せて陰で揶揄するのがⅠ類、孔子を面と向かって非難するのがⅡ類であり、孔子の立場はともあれ、「莊子」の道のよき説明者として登場するのがⅣ類、孔子が稱揚すべき人物として登場するのがⅢ類あるいはⅤ類、特にⅢ類では孔子本來の姿が稱揚されることが多い、という具合に全體を要約することができそうである。

- 13) 佐藤明「司馬遷の見た『莊子』」九州大學中國哲學研究會 中國哲學論集10, 1984年.
- 14) 池田知久『道家思想の新研究—莊子を中心として』汲古書院, 2009, 55頁.
- 15) 前掲:『道家思想の新研究—『莊子』を中心として』, 90頁.

韓愈の雜篇三篇に關する論評について、池田は以下のように「南華眞經評註」の評語による解説を加えている。

韓愈の雜篇三篇に關する論評は、歸有光・文震孟「南華眞經評註」の各篇の末尾につけられた評語の中に見えており、盜跖篇については、韓文公曰、「懺悔列聖、戲劇夫子、蓋效擊莊老而失之者。」とし、説劍篇については、韓昌黎曰、「此篇類戰國策士雄譚、意趣薄而理道疎、識者謂非莊生所作。」とし、漁父篇については、韓昌黎曰、「論亦醇正、但筆力差弱於莊子。然非熟讀莊子者、不能辨。」としている。

池田氏の引用によると、韓愈が盜跖篇・説劍篇・漁父篇を疑っているのは、聖人を誇っている劇畫タッチの作品や、論理的な筋道に不案内な内容、文章の力強さが無い作品であり、莊子らしくない篇はそれらに主眼が置かれていることがわかる。

なお、韓愈の當該文章であるが、管見の及ぶ限りでは韓愈の文集中には発見できなかった。また、方勇の『莊子學史』も同様に歸有光・文震孟「南華眞經評註」の文章を引くが、「這些確實是韓愈所說的話…」と述べていることから、或いは他の書物からの轉寫の過誤であり、韓愈自身の言葉ではない可能性も大いにある。

屈守元・常思春主編『韓愈全集校注』四川大學出版社, 1996年. 閻琦校注『韓昌黎文集注釋』三秦出版社, 2004年. 方勇『莊子學史』第二冊所収「北宋中期的莊子學」人民出版社, 2008年, 35頁. 『歸有光全集』卷十所収「南華眞經評註」上海人民出版社, 2015年, 486, 490-491頁.

- 16) 前掲：『蘇軾全集校注』1089-1091頁の「集評」や『莊子纂要』に、範温『潛溪谷詩眼』他、蘇東坡の意見に対する賛否が纏められている。方勇『莊子纂要』陸、學苑出版社、2012年、547-731頁。
- 17) 關鋒『莊子内篇譯解和批判』所収「莊子外雜篇初探」中華書局(北京)、1961年。羅根澤『諸子考索』所収「莊子“外”“雜篇”探源」、人民出版社、1958年。福永光司『中國古典選9 莊子外篇 雜篇』朝日新聞社、1967年。
- 18) 外篇は書き出しの二字か三字の語句によって篇名がつけられているのに對し、内篇では三文字の非常に凝った名稱がつけられている。また、雜篇の「庚桑楚」二十三、「讓王」二十八、「盜跖」二十九、「説劍」三十、「漁父」三十一は、他の外篇の書き出しが、二字か三字の語句によって篇名がつけられているのに對し、事柄や名稱によって名付けられている。また、殆どの篇は單純に篇首の二語ないし三語を當てられているに過ぎない。前掲：「莊子の對話の説話について」22-23頁。陸德明撰『經典釋文』下、上海古籍出版社、1985、1407-1592頁。
- 19) 前掲：「司馬遷の見た『莊子』」、86・87・89頁。
- 20) 天野鎮雄「莊子庚桑楚篇説話の本文整理私案」東京支那學報8、1962年、11-27頁。松村健一「『莊子』外篇（駢拇～繕性篇）について：儒道交流史研究資料としての位置づけ」集刊東洋學76号、1996年、1-20頁。

参考文献

- 赤塚忠（1974）『全釋漢文大系16 莊子上』集英社
赤塚忠（1980）『全釋漢文大系17 莊子下』集英社
池田知久（1983）『莊子上』學習研究社
池田知久（1986）『莊子下』學習研究社
王先謙（1974）『莊子集解』臺灣・三民書局印行
郭慶藩撰（1961）『新編諸子集成 莊子集釋』中國北京・中華書局
周啓成 校注（1997）『莊子虞齋口義校注』中國北京・中華書局
服部宇之吉 校訂（1911）『莊子翼』富山房
福永光司（1966）『中國古典選7 莊子 内篇』朝日新聞社
福永光司（1966）『中國古典選8 莊子 外篇』朝日新聞社
福永光司（1967）『中國古典選9 莊子外篇 雜篇』朝日新聞社
方勇 撰（2012）『莊子纂要』中國北京・學苑出版社
牧野謙次郎（1914）『漢籍國字解全書 莊子上』早稻田大學出版部
牧野謙次郎（1914）『漢籍國字解全書 莊子下』早稻田大學出版部